ブラジル将棋連盟様
研鑽
九段 佐藤康光

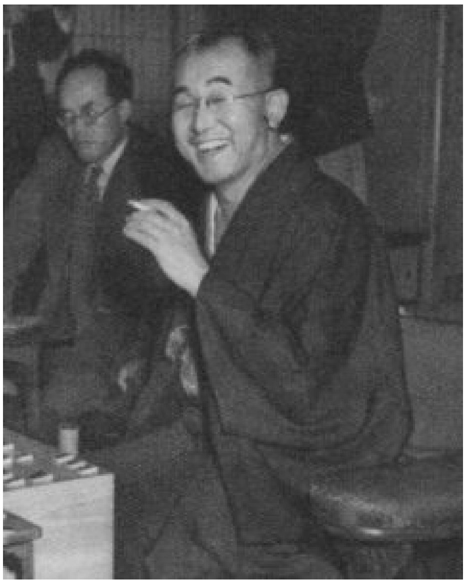
[illegible]

[illegible]

[illegible]International Shogi Magazine[illegible]

[illegible]

[illegible]



木村義雄名人（ｗｉｋｉｐｅｄｉａｃｏｍｍｏｎｓ／中井𣏐夫（朝日新聞東京本社）『アサヒカメラ臨時増刊　朝日新聞報道写真傑作集１９５２』朝日新聞社、１９５２年、ＩＮＤＥＸ．３１）

　ブラジル日本移民１１０周年を記念して、日本将棋連盟から伯将棋連盟へ将棋駒が寄贈された。日本将棋連盟からは折りある毎に、記念品の贈呈が行われている。終戦直後、今からちょうど７０年前の１９４８年、記念すべき第１回目の全伯将棋大会開催時もそうだった。

　当時は勝ち負け抗争によって日系社会が分断されていた時期で、日系社会と親交の深かった木村義雄名人は、その労多大なる事を案じ、せめてもの協力として駒の寄贈を申し出た。（木村義雄＝１９０５ー１９８６年。十四世名人。最初の実力制による名人かつ最初の永世名人）。

　当時の新聞には木村名人からの手紙が掲載されており、いわく掲題の駒は世界に四つしかないという木村名人署名入りの超貴重品。優勝賞品として活用し、皆の励みにして欲しいとの事だ。

　しかし、当時の日本はＧＨＱの占領統治下にあり、国外への物資輸送もまた制限中。「マッカーサー司令部の許可が下り次第必ず」との由だが、その後の新聞を見ても駒到着の報せはなく、伯将棋連盟の古株会員に聞き込みをしてもその存在を知る者は居なかった。

　察するに延期の続く内に沙汰止みとなってしまったのだろう。しかしそれも当時の日本の状況を思えば無理からぬこと。むしろ終戦直後の苦境の中で、遠きブラジルの同志の苦労に思いを馳せ、協力を申し出てくれた事自体が意気であり、大きな励みになったのではないだろうか。大会はその後、社会的分断を乗り越え見事成功し、それ以後も毎年開催され、現在に至っている。

　ところで、今回寄贈された駒は山形県天童市産の柘植製手彫り駒で、市場価格５万円相当の高級品。駒箱には佐藤康光会長の署名と『研鑽』の文字が揮毫されている。

専門家筋が大反對

全伯将棋に〝錦上花〟

勝者に贈る榮光の駒

木村前名人からメッセーヂ

南聖代表決る

杉山老、悠々優勝

木村義雄名人とのやり取りが掲載された当時の記事

（１９４８年2月3日付けパウリスタ新聞）

　駒とともに寄せた祝辞の中で佐藤会長は「『研鑽』は、コツコツと勉強を積み重ねるという意味。これからも将棋を親しまれる方が少しずつでも増えることを願っております」とその思いを綴っている。

□□□